



教職大学院

Newsletter No. 109

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2018.4.7

国立大学と私立大学の連合 ー連合教職大学院の発足によせてー

岐阜聖徳学園大学副学長 副学長 柏木 良明

2018年4月、福井大学を基幹校として、奈良女子大学、岐阜聖徳学園大学が参加した連合教職大学院が始まりました。ユニークな発想で教育界をリードする福井大学、明治時代から続く女子教育の名門奈良女子大学と、教職大学院を通じて連合に加われることは岐阜聖徳学園大学にとりまして大変ありがたい名誉なことでもあります。教職員一同、身の引き締まる思いであります。

当初、福井大学の松木健一教授から、「福井大学と連合を組み、一緒に学校拠点方式の教職大学院をやいませんか。特段貴学に損はないと思いますけど・・・」と話をいただいたとき、正直驚きました。まず国立大学と連合を組み、という発想は考えたこともありませんでした。教職大学院が今後重要になってくることは想像しておりましたが、本学独自で設置することはハードルが高く、棚上げとなっていました。

しかしながら松木教授をはじめ福井大学の先生方が熱心に語る学校拠点方式は、「教員は現場で育つ！」という点からも説得力があり、本学学部の教育方針とよくマッチしたものでした。岐阜の織田、福井の朝倉、何だか因縁を感じました？

今回は、国立大学と違い、岐阜聖徳学園大学は岐阜県以外、特に教育関係者以外の方からはあまり知られていないと思われますので、その概要と教育の特徴を簡単に紹介させていただきます。

岐阜聖徳学園大学は、昭和47年に教員養成を目的とした教育学部だけの単科大学としてスタートしました。それ以来、いくつかの学部を設置して発展して参りました。教育学部では徹底して現場を重視した実践教育を行っております。例えば1年次必修の「学校ふれあい体験」では、学校現場に丸一日3回

出かけ、事前事後学習を含め子供の目からみた学校現場を体験しています。2年次必修の「教育実践観察」では、同じく学校に出かけ教師の目から見た学校現場を学びます。3年次における小学校教育実習、中学校教育実習は原則として母校以外の学校で行います。こうした実習科目の実施に当たり、岐阜県内26市町村の教育委員会と連携協定を結んでいます。学生は高い実践力を身につけることができ、教育現場からの評価も高く全国屈指の教員就職率、正規合格率を築いてきました。卒業した学生に対するサポートも継続して行ってきたつもりですが、ここに教職大学院が加われば鬼に金棒です。福井大学からのご提案は渡りに船でありました。さらに教育に対しても国際的な取り組みが進む奈良女子大学も加わることで、こんなに嬉しいことはありません。

最も興味深い点は、国立大学を基幹校にして、私

内容

- 巻頭言 (1)
- スタッフ退任のご挨拶 (2)
- 第2回運営協議会報告 (7)
- 教員免許状更新講習報告 (9)
- 学校マネジメントコースだより (12)
- 長期実践研究報告会 (15)
- 伊那小学校公開学習指導研究会報告 (18)
- 宇都宮大学教育実践フォーラム報告 (21)
- カリタス中高等学校授業研究会報告 (24)
- 平成29年度学位記授与式 (25)
- 平成30年度教職大学院年間計画 (26)
- 修了生の学校改革実践研究報告タイトル (27)
- スケジュール・編集後記 (28)

立大学が加わるという点です。ひと昔前なら考えられないことですが、相互に補える点も多いと思います。私立大学はトップダウンで動きやすい。文科省からの指導もどちらかというと緩く自由度が高い。小回りがきき柔軟に対応できる、という利点があります。一方で経営効率が問われるため、財政面の問題、教職員が不足する点やブランド力も国立大学に比べて弱いなど、いくつかの弱点があります。また国際化も遅れています。

本学は学生が実習実践には強いが専門的、学問的な裏付けが不十分になることを常に危惧しています。この連合教職大学院のゼミ形式の授業では、こうした点を踏まえ、教科の内容についても深く掘り下げ

て教育を行っていきます。学校現場の課題に向き合う実践力とそれに対する学問的背景、教科専門性の両立を目指します。連合の一角をなす大学としてお知りおき願えれば幸いです。

福井、奈良、岐阜という違った教育環境の情報を交換することは、広域連携の強みとなります。三大学それぞれの場で学んできた内容を毎月議論し合うカンファレンス、とても楽しみです。教育現場の課題に対処する実践力と学問をバランス良く身につけて、教育現場のリーダーとなれる教員を育てていく。こうした命題について三大学が手を携えて進め、本研究科のさらなる発展を目指しましょう！

スタッフ退任の挨拶

教職大学院で学ぶ皆さんへ

福井大学教職大学院 教授 倉見 昇一

福井大学教職大学院では何を学ぶのでしょうか。省察することの意味でしょうか？あるいはコミュニティの理論と実践でしょうか？またはピーター・センゲの学習論？それとも組織マネジメントの知識やスキルでしょうか？

皆さんがそれぞれの学校やインターンシップにおいて、役割を担ったり、授業をしたり参観したり、子どもたちと関わったりする中で、課題意識や問題意識があれば、教職大学院で一緒に学ぶ仲間や教員スタッフとのカンファレンスで得るものは、仮にこれらのことを知らなくても（あるいは理解できなかったとしても）、大きな学びとなることは間違いのないでしょう。また、ラウンドテーブルでは、どんな職業の、どんな人からの言葉もヒントになったり、心に響いたりすることでしょう。

大学での学びはある意味机上のものに過ぎません。現実の実践の中にこそ本当の学びがあります。しか

しながら、現実には複雑で面倒です。つつい流してしまいがちです。現実に向き合い、問題や課題を解決しようとするにはエネルギーが要ることです。

さて、私は福井大学教職大学院で何を学んだのでしょうか。

厳しい現実の世界に戻ったばかりの今の私に、確かに刻み込まれているものは、教職大学院の教員スタッフ、院生の先生方や拠点校・連携校の先生方、ストレートマスターの学生の皆さん、大学の事務職員の方々、そして私の福井での生活を豊かに支えてくれた地域の方々と共に過ごし、共に語り聴き合った3年間の年月という事実です。

この事実が私の仕事（実践）にどのように反映されるのか、私の人生にどのような価値を与えるのかは、私自身が現実と向き合う中で真に省察することなのかもしれません。

福井大学教職大学院には、2015 年 3 月から 2018 年 3 月まで、3 年と 1 か月の間お世話になりました。思い返せば、初めての常勤、初めての一人暮らし、初めての北陸、初めての科研費、初めての結婚、初めての昇進、初めてのボーナス、初めての退任のあいさつ（これもそうです）と、終始、初めてのことばかりでした。こう振り返ってみると、大人の第一歩を踏み出したのが福井での生活であったように思います。

そのことが関係しているのでしょうか、この間、自分の子ども時代について思い出すことが非常に多かったような気がします。深層心理学的に見れば、30 歳になるまで学生であった自分がようやく社会に出たことで、幼い自分との決別を無意識に行っていたのかもしれませんが。とはいえ意識レベルで考えてみると、その理由はもっと単純です。ご存知の通り、福井大学ではカンファレンスなどで幾度となく教育現場の経験に思いを馳せることが求められるわけですが、私はこれまで学校の教壇に立ったことがなく、授業研究をしたこともないため、主として参照できる経験が自分自身のそれ以外にほとんどなかったためです。要するに、“自分の子ども時代を思い出す”という作業が工作上必要だったわけです。

この作業はしばしば躊躇されるものでした。というのも、私にとって学校（特に小学校と中学校）という場は、決して心地の良いものではなかったからです。毎日朝から夕方まで拘束され、短い休憩時間以外トイレに行くにも許可が要り、なにより、理不尽に怒る「学校の先生」がいる場所。これが私の（あくまで個人的な体験に基づく）学校のイメージだったからです。

そういうわけで、学校、特に「学校の先生」と接しなければならぬ福井大学での仕事は、私にとってはなかなか勇気のいるものでした。博士論文を書いた後、どこにも就職できず、“アメリカで研究”という大義名分の元、宿泊先に湧いて出るアリの観察とインターネットサーフィンに費やしていた自分を、畑違い（一応、専門は臨床心理学です）にもかかわらず拾ってもらった恩義から、何とか適応してその恩に報いていこうというのが、私自身が最初に

絞り出したモチベーションでした。

しかし、この 3 年で出会った先生方によって、私の「学校の先生」観は一変しました。いや、3 年どころか半年ほどで、すっかり変わっていたと思います。お一人お一人の名前を挙げることは控えますが、元・現職を問わず、本当に尊敬できる先生方にたくさん出会いました。授業の中で、カンファレンスの中で、研究会や講習で、そして学校を往復する車中やちょっとした立ち話の中で、子どもたちに対する配慮と客観性を同時に（しかもいたって自然に）持つ先生方と仕事ができたと経験は、私が福井大学で得た最大の財産となりました。私は福井大学で教師教育分野の教員として、つまり言ってしまうと「学校の先生」を教える側として採用されたわけですが、ふたを開けてみれば、先生方の長い経験と深い見識に一生徒として学ばせていただくばかりだったと思います。

正直に申し上げれば、今でも学校独特の雰囲気は苦手です。学校のイメージが根本的に変わったわけでもありません。しかし、そこに携わっている先生方の専門性に触れることができたことで、教師観は間違いなく変わりました。このことは、私自身の実践や研究にも変化をもたらしています。最近では、学校領域における心理支援で、いかに先生方の専門性を支えられるかということを考えています。

最後になりましたが、同僚の研究者教員の先生方にも心より感謝申し上げます。初めから最後まで、常に配慮の中で接していただきました。一緒に仕事をすることができ、とても光栄でした。仕事の中では色々ご迷惑をおかけしてしまったと申し訳なくも思っております。また、ストレートマスターの皆さんからも色々なことを教えていただきました。教師として学ぶ皆さんの軌跡に少しでも触れることができ、とても楽しかったです。それから、事務の方々にも本当に助けられました。膨大な仕事を抱える中にもかかわらず、いつも丁寧かつ親切な（さらに驚異的に迅速かつ的確な）対応を頂き、実務的にだけでなく精神的にも本当に支えられました。これまで 3 年と 1 か月、本当にありがとうございました。

Two Years in Fukui: Culture, Education, and Re-Learning How to “Be”

福井大学教職大学院 講師 Elizabeth Sugino Hartmann



Learning, teaching, and researching for the past two years at the University of Fukui has been a dream come true. Before coming to Fukui, I was anxious and did not know what to expect. I was excited to see lesson study in action and to understand more about Japanese culture and education. In particular, I was excited to learn more about the Department of Professional Development of Teachers' (DPDT) school-based approach to supporting professional learning.

As I write this, I am reflecting on this question:

“What did I learn in these two years at DPDT?”

As anticipated, I learned much about Japanese lesson study and DPDT's school-based approach. I learned more as an active participant in lesson studies and DPDT's programs than I would have as a mere observer. I shared about the U.S. education context and issues and compared this with current education issues in Japan. I developed my Japanese language ability and gained a better understanding of the structure of Japanese schooling and education.

These, of course, are the obvious things I learned. I expected to learn about lesson study, DPDT, Japanese language, culture, and education. What I was not expecting was 1) the opportunity to work with educators from all over the world, 2) the challenge of re-learning how to “be,” 3) the expansion of my perspective of culture and learning, and 4) having colleagues, students, and teachers become my good friends and co-learners. As I reflect on two years, these less obvious and unexpected lessons became most valuable to me in my experience living in Japan.

Working with International Educators

I have always been interested in Japanese culture and schooling, and I was excited by the opportunity to live and work in Fukui. It was wonderful working alongside Japanese educators and learning more about schooling in Japan. I admire the intellect and professionalism of

Japanese school teachers and the spirit and perseverance of Japanese students. From the moment I entered Japanese schools, I was learning about what “school” means in Japan. Entering Japanese schools entailed taking off my shoes in exchange for slippers, observing students open each lesson with an “Onegaishimasu” (お願いします) and close with gratitude, being awed by the art of bansho (板書), watching students clean, being served lunch (給食) by students, seeing students openly sharing their thinking with peers, and being amazed at how teachers willingly collaborate and work cooperatively in the teacher's room and during lesson studies. These things may seem ordinary to a Japanese educator, but as an American educator, I was amazed and given new images for what school, learning, and teaching can be.



To my delight, I not only learned worked with Japanese educators, but other educators from all over the world. Being a member in the OECD Innovative School Network gave me opportunities to work with Japanese teachers and students from Fukui as well as Singaporean professors, teachers, and students. The schools I worked with in Fukui and Singapore are among the most innovative schools, particularly for project-based learning. I enjoyed seeing how these schools support inquiry-based learning and adapt project-based learning to their own contexts.



At the culminating Student Innovation Forum in Tokyo, I was impressed by the students (Japanese, Singaporean, and others) in their abilities to lead their peers and to take ownership over researching and addressing significant social issues. It was inspiring to see teachers and students thinking together about how to support students to develop the competencies needed for a globalized society.

Through the JICA Knowledge Co-Creation Program, I was able to work alongside educators from various African cultures, to visit Malawi, and to understand and see the challenges that different educators face in their home contexts. I was inspired by how these teachers persevere in challenging circumstances, such as teaching a class of 100 students, using inquiry-based methods with limited resources, and taking on large social issues inside the classroom.



I also learned about cultural context, challenges, and opportunities in Australia, Bhutan, Cambodia, Columbia, Indonesia, Lithuania, Myanmar, and the Philippines, by working with teachers who were studying at DPDT and also learning about Fukui's education system and lesson study approach. Many of these teachers were instrumental in supporting the World Association of Lesson Study (WALS) Lesson Study Immersion Program (LSIP) in Fukui last fall. It was a privilege to be a part of DPDT's efforts in connecting educators from all over the world to think about how to support professional learning and to learn about lesson study. I felt lucky to be able to share about DPDT's programs and Fukui's unique approach to lesson study with these international educators, and was inspired by their efforts to take up, adapt, and innovate lesson study in their own contexts. Their efforts, challenges, and innovations are similar to what I will encounter as I bring ideas

of lesson study school-based professional learning to Seattle.

The Challenge of Re-learning How to "Be"

I am very comfortable and confident in the American educational context, because I know how to be a student and a teacher in U.S. schools and English is my native language. This confidence is not arrogance, but comfort in understanding how to "be" in a particular context. Before coming to Japan, I took for granted how much I understand about the social norms and expectations in the American context. I know how to follow the rules: the literal rules such as university policies and federal laws and the implicit rules such as social etiquette and following cultural norms and expectations. Coming to Japan challenged me to re-learn what it means to "be" and live in a particular context.

In Japan, I struggled with wanting to understand (and wanting to follow) both literal and implicit rules, but not knowing how. I experienced the struggle of having things to say, but not being able (or confident enough) to express my ideas. I learned to be okay with making mistakes and being the odd one, despite wanting to be responsible and like everyone else.

This struggle of being an outsider, the struggle with language, and the cultural mismatch between myself and where I lived, are not unique to me. I recognized immediately that this is what my students in the U.S. faced every day. The U.S. is a diverse country. Students come from a variety of cultural and linguistic backgrounds. Often there is a cultural mismatch between students and the classroom. As the world becomes increasingly "globalized" and connected, educators (in the U.S. and elsewhere) will need to think about how to teach in ways that are culturally responsive to their students. I have a deeper understanding of what it means to be culturally responsive after having experienced myself the cultural mismatch that many students experience.

Expanding My Perspective of Culture and Learning

Through the experiences discussed above, I have expanded my perspective of culture and learning. Teaching is a cultural activity (Stigler and Hiebert, 1998). However, if you only experience your own culture and your culture's way of being,

then you will only see from that perspective. Being in Japan and working with educators from around the world pushed my understandings of learning, teaching, and school. I have more images, ideas, and inspiration for the possibilities in education. DPDT showed me possibilities for strong university - school partnerships, collaborative professional learning communities, and productive teacher - student norms of interactions.

DPDT frames learning as a continuous spiral. My experiences in Japan (particularly out of my comfort zone) not only built on my experiences as an educator in the U.S., but challenged my assumptions about teaching and learning. I believe that we all need these types of new experiences and challenges to push our ways of thinking. Many international programs and institutions (e.g. University of Fukui, OECD, JICA, etc.) use words and phrases like “borderless,” “global competencies,” and “innovative.” Educators and students need new opportunities, challenges, and international experiences to move beyond simply talking about these concepts to acting on and embodying these ideas. Learning is a continuous process, not just for students but also for teachers. I believe that DPDT supports teachers and students in this kind of continual learning process and in having international collaborations and experiences. I am grateful for the opportunity to be involved in these international efforts and in supporting teachers and students around the world.



Gratitude and Future Collaboration

I cannot express enough how grateful I am for the people I met during the past two years. Without a doubt, the most meaningful part of this experience has been the people.

- I am so grateful for the **school administrators and teachers** who opened up their schools, allowed me to conduct research, and learned alongside me during lesson studies. I appreciate your dedication to Japanese education and commitment to students.
- Likewise, I appreciate all of the **international educators** I met along the way. You have challenged me to redefine what learning can be and the possibilities for supporting students in diverse cultural and linguistic contexts.
- I am thankful for my **graduate students** (院生) who were so patient during our Thursday and Saturday conferences and who used English and very easy-to-understand Japanese with me. Seeing you reflect on your practice and working with your students was energizing to me, and I wish you the best of luck as you begin your career in education.
- Words cannot convey my gratitude for my **colleagues**. It was a joy to work with you, and I appreciate your support, kindness, and guidance. Because of your help, I was able to adjust to life in Japan, learn about Japanese schooling, and develop wonderful friendships. I am impressed by your work and research, and I sincerely hope to continue working with all of you.
- Finally, thank you to the **students**. I often get stressed by research deadlines or distracted by obligations and work, but the heart of my work is students. They kept me motivated and reminded me of why I do what I do. Visiting schools was always energizing, and I will never forget the smiles and voices of the students in Fukui.

Leaving Fukui was a very difficult decision, and I hope to continue collaborating with DPDT and other international educators whom I met during the last two years. I feel that I did not contribute enough, and I am looking forward to visiting Fukui again and engaging in future collaborations.

In Seattle, I will continue to teach mathematics education courses and to work with school teachers. As I continue teaching and researching, I will draw on my experiences with DPDT's school-based approach and Japanese lesson study. I am also finishing my research comparing Japanese lesson

study in Fukui and Math Labs here in Seattle. I am looking forward to sharing this work when it is published and hope to continue collaborating with and connecting educators from Fukui and Seattle.

Thank you, DPDT, for two very meaningful years.

退任された3名の方の所属・職名は 2018 年3月までのものです。

第2回 運営協議会報告

去る3月13日（火）、福井大学文京キャンパス教育系1号館6階コラボレーションホールにて、平成29年度第2回運営協議会を開催しました。石井バークマ麻子教育学研究科長、来賓の片柳成彬県教育庁教育政策課長の挨拶の後、全体協議及びグループ別協議を行いました。前半の全体協議会では、次の内容が協議されました。

- (1) 平成29年度年間報告及び平成30年度の取り組みについて
 - ①連合教職大学院
 - ②学校改革マネジメントコース
 - ③県教委・教育総合研究所との協働組織
- (2) 平成30年度学生募集状況について
- (3) 教職専門性開発コース修了者の就職状況について
- (4) 要項改正について
- (5) その他



全体協議では、教職大学院から、平成30年度からスタートする本学、奈良女子大学と岐阜聖徳学園大学の3大学による連合教職開発研究科（連合教職大学院）の概要について説明をしました。次に、学校改革マネジメントコースで最初の修了生を送り出

すにあたり、2年間の現職教員の学びの様子について説明をしました。また、県教育委員会および教育総合研究所との協働組織については、初めて共催した教員免許状更新講習の実施報告をしました。他には、本年度の入試と教員採用試験の結果および連合教職大学院になるにあたり運営協議会の要項改正について説明をしました。後半のグループ協議では、県教育委員会、出先教育機関、市町教育委員会、拠校、連携校の5グループに分かれ、院生の学びにおける成果と課題、教職大学院への要望等について活発な意見交換がなされました。各グループで出された主なご意見は、次のとおりです。

【県教委】

- ・就職状況で、教員採用試験の合格者が少ない。採用に向けてのバックアップが必要である。
- ・現職教員院生の1年履修について、県教委としても実現が可能か研究を深めたい。
- ・学校改革マネジメントコースでの学びでは、県教委作成の「学校マネジメント集」の活用などで連携していけるとよい。
- ・教職大学院と共催した教員免許更新講習は、次年度は今年度の反省を活かしてより充実したものにしていきたい。
- ・県内の教員の確保について地域差がある。学部・地域枠や採用の地域枠も考えていく必要がある。
- ・教科に力を入れた学びも必要である。

【出先教育機関】

- ・学校改革マネジメントコースの院生同士が学校運営という視点で話し合う機会を増やしてほしい。
- ・育成指標と研修の一体化を具現化していく必要がある。

- ・教育総合研究所、特別支援教育センター、嶺南教育事務所、幼児教育研修センターの連携講座や協働研究会の相互参加などで協働体制を強くしたい。

- ・特別支援教育センターの専門研修の受講により認定資格が与えられるが、教職大学院で学ぶと県の認定資格を得られるような仕組みがあるとよい。特別支援教育コーディネーターの資格が管理職試験でのインセンティブになるとよい。

【市町教育委員会】

- ・教員院生が2年間の学びの間に異動の可能性がない人に受験を勧めている。管理職になって欲しい人を選んでいるが人選に苦労している。

- ・外国人児童が増加しており、指導スタッフを揃えているが追いつかないのが現状である。

- ・学校の課題を行政と一緒にどう解決していけるかを考える必要がある。長期実践報告での課題の取り組みを議会に提案して予算化していくこともできるのではないかな。

- ・3年履修については入学年度内に申請できるので、入学後に各自が検討することができる。院生と確認してどうするか判断させたい。

- ・今後はカリキュラムマネジメントの力が重要になってくる。英語や総合については、教職大学院で附属義務教育学校をモデルとした協働研究ができたらよい。今後は指導主事にもこの力が必要になってくる。

- ・高校から学校改革マネジメントコースに入学する人が増えてきた。教務主任の立場でマネジメントコースに入ってくるのもよいが、ミドルリーダー養成コースでも同様な学びが対応できる。

- ・教職大学院の仕組みが校長にあまり知られていない。入学すると学校の仕事が手薄になると心配する校長もいる。校長にもっと教職大学院をアピールして教員への入学を薦めてもらうようにしたい。校長会などで説明していきたい。

- ・教職大学院も10年が経ち、修了院生が管理職となり、その地域をまとめる時代に入っている。高浜町では毎年、修了生がおり、修了生がネットワー

クをつくって教職大学院での学びを地元で還元できるように研究を始めている。

【拠点校】

- ・インターン院生には、いろいろやってもらって助かっている。毎年継続して来てほしい。できれば、ひとつの学校に複数の院生を維持してもらいたい。

- ・振り返りなどメンターの教員とのより良い関わりの場を多く持たせたい。

- ・インターン生には助かっている。講師と同じように働いてもらっているのも、県や市町の事業と連携した金銭的な援助ができるとうい。

- ・教員採用試験に合格できるよう支援もしていきたい。

- ・インターン院生には多くの授業をさせ、教員としての経験を積ませたい。

【連携校】

- ・校長として自校の教員院生との関わり方がわからない。教職大学院での学びがどういうものなのか、どんな計画で進められるのか、どんなレベルのレポートでいいのかなど不明な点があり、学びのレベルがはっきりしない。教職大学院には、もっと積極的に院生と関わり、高い能力を身につけさせてほしい。

- ・院生の実践テーマ設定や実践の省察などに教職大学院にもっと深く関わり、院生自身も学校全体を巻き込むムーブメントをつくってほしい。

以上のように運営協議会で頂いた貴重なご意見は、教職大学院で分析・検討を行い、今後の教職大学院運営や状況改善に活かしていきたいと考えています。次回は5月に開催を予定しています。

年度末のお忙しい中にもかかわらず、ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。



平成 29 年度 教員免許状更新講習報告

福井県との共催として行った

平成29年度教員免許状更新講習を終えて

連合教職大学院 准教授 小杉 真一郎

1. はじめに

教員免許更新制は平成 21 年 4 月にスタートし、同時に、平成 29 年度で 9 年目を迎えることとなりました。本学においても、受講者の先生方に満足いただけるよう、毎年度多岐にわたる分野・領域で創意工夫に富んだ講座を積極的に開設してきました。特に、本教職大学院では、開設当初から「新しい時代をひらく教師の実践コミュニティ ―実践の経験と知恵を共有するために語り聴き・読み綴る―」をキーコンセプトに、専門職として探究し合う新しい方法を採り入れた講習を実施してきました。

そして、平成 29 年度は新たに福井県教育委員会と共催となり、これまで福井県総合研究所で行われてきた従来の 10 年経験者研修などの基本研修と一体化し、協働で実施することになりました。こうした動きは、文部科学省や中教審が提言しているものではありませんが、全国に先駆けたものです。これにより、福井県の先生方は基本研修として、福井大学教職大学院が行っている免許状更新講習を受けることで、新学習指導要領で謳われている「主体的、対話的で深い学び」を教育現場で実践するために有効な教員自身の学びを、全員が受けられることになったわけです。

2. 福井県教育委員会との協働

～基本研修との融合～

(1) 基本研修との融合

これまで福井県教育委員会は、福井大学教職大学院のミドルリーダー養成コースに現職の先生方を院生として入学するように、働きかけてきました。その修了生の先生方の多くが、現在では、県や市町教育委員会の指導主事や管理職になり、学校現場でも校長、教頭となっておられます。教育行政や現場でのリーダーに、本学教職大学院での院生としての学びの大切さを実感する人たちが多く占めるようになってきた現段階で、できれば福井県の教員全員がこうした学びを受けられたらという、福井県教育委員

会と本学教職大学院双方の思いが一致しました。そして、平成 29 年度から、免許状更新講習と福井県教育委員会の基本研修が一体化し、共催として実施されることになったわけです。

基本的な講習の流れは、平成 28 年度までのものを踏襲していますが、受講者が昨年度の 239 名から倍近くに増加することが予想されたことや、より充実感の得られる研修にするために、レポート作成や話し合いに必要な時間の確保、優れた最新の実践事例資料の収集、ふあしりテーションをしていただく新任教頭のファシリテーションスキル向上のための研修の工夫等、これまで課題だった点を含め、改善を行いました。

実際に共催として実施するにあたっては、いくつかの課題も浮かび上がってきました。

基本研修として実施することになるため、大学主催のように受講者から講師料は取れなくなりました。事務的なことの大半は、研修機関である福井県教育総合研究所が、会場提供も含め担うことになりましたが、予算的にはなかなか県の負担だけで賄える状況ではなく、教職大学院が平成 28 年度までと同様「学校現場と連携・協働した実践的講習開設支援事業」として文部科学省に補助金を申請し、必要経費を賄うことができました。

一方で、この 3 日間の研修は、レポートを 3 日間連続で書くことや実践を読み込むこと、長時間の話し合いのセッションも何度かあることから、正直ハードであると考えて敬遠する受講者も少なくなかったのが現状です。しかし、他方でハードだからこそ、教員としてもう一度自分を見つめ直し、さらなる資質の向上ができると強いモチベーションをもって受講した方も多く存在していたのも事実です。中でも保育士や私立学校の先生方、県外からの受講者の方々には、県の基本研修と一体化したことで、受講していただけない状況になったことは、誠に残念ではあります。今後は、このコンセプトの免許状更新

講習の良さを広く県内外に発信することで、多くの大学や県でも同様の本教職大学院スタイルの講習を始めていただけることを期待するところです。

3. 平成29年度の講習を振り返って

～受講者評価の分析などから～

平成29年度は、福井県教育委員会との基本研修と一体化ということもあり、倍近くに増加した受講者への対応や県総合教育研究所のスタッフとの初の協働において、最初の運営面でスムーズにいかない面がありました。しかし、教職大学院、福井県総合教育研究所の双方のスタッフの協働により、様々な課題に対してその都度改善を加え、無事5期（各3日間）の日程として予定していた全講習を無事実施することができました（表1参照）。

表2は、年度ごとの受講者の推移及び「Ⅰ講習の内容・方法」「Ⅱ知識・技能の習得の成果」「Ⅲ運営面」の3項目に対し4段階で受講者が評価した結果を示したものです。

第1期は、福井県教育総合研究所が移転して初めて使用する会場であり、受講者も昨年度までの全受講者数の半数を超える数であったことから、会場内での移動時間や受講者の作成したレポート印刷に予想を超える時間がかかるなどの運営上のトラブルがあり、受講者に行ったアンケート評価も運営面をはじめとして例年より低い評価となりました。しかし、印刷方法の検討、使用する会場の変更や移動および休憩時間の変更など状況に応じて対応したことで、第2期、第3期と日程を経るごとに受講者の評価は改善し、第5期には例年並みまで回復することができました。

また、平成28年度までの講習と同様、経歴の異なるメンバーとグループを構成しながら、目の前の課題に主体的に協働で対話しながら、実践と深い省察を繰り返す流れで3日間の講習を行ってきましたが、本講習を基本研修ということで、本人の希望とは異なって受講した者も多く、「講習の意味が分からな

い」「講義が難解である」「講習が3日間見通せない」「3回のレポートがうまく書けない」などといった意見もいくつか聞かれました。

レポート作成や日程に見通しがもてるよう、何度か修正を加えたり、講義の内容もやや平易にしたりなどの工夫を加えたことで、内容や方法、習得の成果でも評価が上向いてきました。

ただし、内容や方法については、まだ例年より低い評価にとどまっているため、さらに受講者にとってわかりやすく、見通しをもって意欲的に取り組むことのできる工夫は必要だと考えています。

4. 平成30年度以降の教員免許更新講習に向けて

平成30年度は、10年に1度の免許状更新の1サイクルが完了する節目の年になり、受講者も今年度のさらに倍になることが予想され、県下では800名近い教員が対象になると思われます。日程に関しては、教職大学院や県教育総合研究所の年間行事予定から考えても、これまでと同様の時期に計5期に分けて実施するのが精いっぱいです。となると会場をどうするのか、一度に入りきらない場合もどうするのか、レポートの印刷やスタッフの動きをどうするのか、明らかに新任の教頭では足りなくなるファシリテーターの確保、そしてさらに必要となる予算をどう組むのかなど、おそらく今年度をさらに上回る課題が山積しています。

しかし、受講者にとっては、未来を支える子どもたちへの教育を行う教員として、資質を高めるための、10年に1度の大切な3日間の講習である。よりよい講習、基本研修となるために、教職大学院と県教育総合研究所および県教育委員会が知恵を絞りながら、対応していきたいと考えています。

最後に本講習推進のためにご尽力いただいた福井県教育委員会、福井県教育総合研究所、新任教頭の先生方、福井大学教職大学院のスタッフ、そして受講者のみなさん、その他関係されたすべての方に感謝申し上げます。

表1 福井大学教員免許状更新講習の日程（5期分）と受講者数

期	日 程	受講者数(実数)	会 場
1	7月24日(月)～26日(水)	134名	福井県教育総合研究所(坂井市)
2	8月 8日(火)～10日(木)	90名	福井県教育総合研究所(坂井市)
3	8月16日(水)～18日(金)	45名	福井県嶺南教育事務所(小浜市)
4	8月23日(水)～25日(金)	85名	サンドーム福井 (越前市)
5	12月25日(月)～27日(水)	32名	福井県教育総合研究所(坂井市)

表2 福井大学教員免許状更新講習の受講者評価

※平成26年度～平成28年度は、福井大学単独実施の結果

【必修】

(%)

年度	受講者数	Ⅰ 内容・方法				Ⅱ 習得の成果				Ⅲ 運営				
		よい	だいたい よい	あまり十分 ではない	不十分	よい	だいたい よい	あまり十分 ではない	不十分	よい	だいたい よい	あまり十分 ではない	不十分	
平成26年度	245	52.7	43.3	3.5	0.5	55.8	40.1	4.1	0.0	64.5	34.0	1.3	0.2	
平成27年度	195	55.2	42.6	2.2	0.0	58.2	38.5	3.3	0.0	73.5	23.7	2.9	0.0	
平成28年度	239	42.7	52.6	4.7	0.0	44.8	49.3	5.9	0.0	58.5	38.4	3.1	0.0	
平成29年度	1期	134	20.9	59.0	17.9	2.2	29.9	58.2	11.2	0.7	30.6	57.5	11.9	0.0
	2期	90	37.8	56.7	5.6	0.0	47.8	48.9	2.2	1.1	52.2	41.1	6.7	0.0
	3期	45	40.0	57.8	2.2	0.0	51.1	46.7	2.2	0.0	55.6	40.0	2.2	2.2
	4期	85	30.6	56.5	12.9	0.0	40.0	54.1	4.7	1.2	44.7	45.9	8.2	1.2
	5期	32	43.8	46.9	9.4	0.0	53.1	40.6	6.3	0.0	59.4	37.5	3.1	0.0

【選択必修】

年度	受講者数	Ⅰ 内容・方法				Ⅱ 習得の成果				Ⅲ 運営				
		よい	だいたい よい	あまり十分 ではない	不十分	よい	だいたい よい	あまり十分 ではない	不十分	よい	だいたい よい	あまり十分 ではない	不十分	
平成28年度	173	63.0	35.6	1.1	0.3	65.6	33.9	0.3	0.2	64.7	33.2	1.9	0.2	
平成29年度	1期	132	22.0	62.1	13.6	2.3	32.6	59.8	6.1	1.5	19.7	52.3	24.2	3.8
	2期	90	35.6	56.7	7.8	0.0	54.4	37.8	7.8	0.0	45.6	50.0	4.4	0.0
	3期	45	42.2	53.3	4.4	0.0	51.1	44.4	4.4	0.0	55.6	37.8	4.4	2.2
	4期	86	36.0	53.5	10.5	0.0	51.2	47.7	1.2	0.0	44.2	47.7	5.8	2.3
	5期	32	56.3	37.5	6.3	0.0	65.6	34.4	0.0	0.0	65.6	34.4	0.0	0.0

【選択】

年度	受講者数	Ⅰ 内容・方法				Ⅱ 習得の成果				Ⅲ 運営				
		よい	だいたい よい	あまり十分 ではない	不十分	よい	だいたい よい	あまり十分 ではない	不十分	よい	だいたい よい	あまり十分 ではない	不十分	
平成26年度	72	63.2	35.0	1.8	0.0	67.4	29.6	3.0	0.0	64.8	35.2	0.0	0.0	
平成27年度	68	58.2	40.8	1.0	0.0	67.0	30.2	2.8	0.0	73.8	21.1	5.1	0.0	
平成28年度	120	65.7	34.3	0.0	0.0	66.5	32.7	0.6	0.0	77.2	21.7	1.1	0.0	
平成29年度	1期	111	24.3	61.3	14.4	0.0	33.3	56.8	9.9	0.0	14.4	57.7	25.2	2.7
	2期	77	49.4	39.0	11.7	0.0	54.5	41.6	3.9	0.0	48.1	44.2	6.5	1.3
	3期	36	47.2	47.2	5.6	0.0	58.3	38.9	2.8	0.0	50.0	50.0	0.0	0.0
	4期	75	52.0	46.7	1.3	0.0	58.7	38.7	2.7	0.0	60.0	37.3	2.7	0.0
	5期	28	64.3	35.7	0.0	0.0	75.0	25.0	0.0	0.0	78.6	21.4	0.0	0.0

マネジメントコースだより

2年間の学び

学校改革マネジメントコース2年／坂井市立丸岡中学校 林 小百合

平成 28 年 4 月から 2 年間、文部科学省国立教育政策研究所「魅力ある学校づくり調査研究事業」の指定を受け、その研究主任として取組を進めてきた。平成 28 年度第 1 学期、他の組織スタイルを真似、トップダウン型の方向性を打ち出しスタートから組織がうまく機能しなかった。何ヶ月も悩み続けた末、修正を加え、ようやく年 3 回の PDCA サイクルを機能させながらの取組に変更しながら約 1 年半取り組んできた。学期毎の子どもの声に向き合い、その結果を検証し、何が課題かをチームで話し合い、その課題を解決するための具体的方策と新たな目標を語り合う PDCA サイクルを確立した。学期中は学年というコミュニティのメンバーがとことん語り合い、そこから合意形成された具体的実践内容を記入した PDCA シートを作成し、そして夏と冬には校区内全職員が集い、成果と課題を語り合ってきた。この 2 年で、何が変えられたのか、何が変わったのか、はっきりと言えることはない。しかし、子どもとの関わり方、子どもの声に常に寄り添う実践、授業改善と授業研究会、居場所づくりにつながる授業づくりと集団づくり、小中の子どもたちと教員同士の交流、保護者や地域との連携。これまでの取組を静かに思い出しながら、「学校改革」に向かって何かを変えようと取り組んできたことは決して無意味ではなかったと、今振り返る。

自信をもって言えること、それは子どもたち、教職員、保護者、地域を互いにつなぐこと、そしてさらに学校とつなぐことで、それぞれが成長し、互いに関係し合うことでさらに全体として成長していきける生き生きとした組織にできるということ。そのためには、子ども、同僚、親、地域の方々、それぞれとの距離を縮め、強い信頼関係を築いていくことが不可欠であり、そのような関係を築くにはとことん本音で語り合うという地道な作業からしか生まれないこと。若手やミドルだけでなく、ベテランといわれる世代の教員も、全てが目の前の課題に背を向けることなく決して諦めず立ち向かっていくために絶えず学び続け、互いに協働しながら実践を重ねていく必要があること。「学校づくり」はこうしてつな

がり合ってしか、なし得ないということを確認できた。

学校改革マネジメントコースへの入学と「魅力ある学校づくり調査研究事業」の研究主任としての任務が、平成 28 年度 4 月同時にスタートした。学校現場で様々な実践を重ね、1 ヶ月に一度教職大学院で多くの院生や先生方と語り合いながら現場での実践を捉え直し、この 2 年間歩んできた。新採用から長きに渡り中学校の担任として歩み、その後 2 年間の学年主任、1 年間の生徒指導主事を経験した。この 3 年間も、これまでの自分とは大きな変化を感じていたが、教職大学院で学んだこの 2 年間は比べようもないくらい自分が大きく変化したように思う。まさに教員としての転換点、ターニングポイントになった。管理職のために新設された学校改革マネジメントコースの一期生としての学びと、文科省指定の研究主任としての学びが、私を大きく変えたのだろう。学校のリーダーとしてのあるべき姿、管理職として必要な資質能力、学校を生きた組織に成長させるためにリーダーがすべきこと、このようなことを常に自分に問いかけるようになってきていた。きっとリーダーというものを大きく意識するようになったからだと思う。

教育について、教員のあるべき姿について、そして学校のあり方についてもう一度学び直しをしようとして教職大学院に入学した。大学時代に受けた講義のように何かを教えてもらえるのかと思っていたが、そうではないことを知った。毎月のカンファレンスやラウンドテーブルでは学校で積み重ねた実践を語り、他の院生の実践を聴くことで自分の実践を自然と捉え直すことができた。夏の集中講座では分厚い理論書や優れた実践記録を読み解くことで、自分が考える授業観や教育観が再び呼び起こされ、教育を問い直す機会を得た。福井大学教職大学院は研究と実践を同じ重さで扱っていた。理論や他の実践者から学んだことを学校現場で実践し、実践で分かったことや疑問が湧いたことに対してまた理論から研究するという、研究の営みと実践の営みが交互に繰り返

返され、自分の中で積み上がってくるのをありありと感ずることができた。そして、理論を理論の世界として捉えるのではなく、理論が実践の中でどう位置づけられるのかといった新たな視点ももつことができた。

教職大学院での学びと「魅力ある学校づくり」の研究に並行して取り組んできたことで、理論と実践の往還を意識した2年間。もしかすると一番変わったのは私自身かもしれない。学校を変えよう、先生方の意識を変えようと必死になって歩んできたが、そのことを通じて私自身が一番変わることができたのではないと思う。ずっと大切にしていたことが呼び覚まされたり、今まで考えなかったようなことに思いを巡らされたりした時間。教育について改めてじっくり考え、理想の学校の姿に思いを巡らせた時間。これらの時間は私にとって本当にかけがえのないものだった。私の思考に変化をもたらしてくれ

た教職大学院での学び、これから進む新たな教員人生に大きな光を与えてくれた教職大学院に、心から感謝したい。私にとってこの2年間は、本当に魅力的な時間であった。

最後になりましたが、福井大学教職大学院の先生方は、私たち院生をいつも温かく迎え入れて下さり、適切なご指導や励ましの言葉を与えて下さった。また学校や校区全体の学びを支え、温かく導いて下さった。2年間の心温まるご指導に心より感謝申し上げたい。そして、この2年間共に学び続けてきた仲間たち。年齢や経験も、校種も、時には職種も異なる人と語り合うことで、教員にとって大切にすべき根幹の部分に気づき、今後の教員としての生き方を見出すことができたように思う。教職大学院でのこの2年間の貴重な学びとかけがえのない出会いを財産に、新たな道を歩んでいきたい。

2年間のセッションを振り返る

学校改革マネジメントコース2年/若狭町立上中中学校 片山 浩

「教職大学院でどんなことをしているのか。」という問いに対して答えようとする、カンファレンス、セッション、ラウンドテーブルなどのカタカナを説明することになり、一言で言いにくい。また、自分が学生の頃に受けた授業（講義）はほとんど無いのでイメージもしにくい。やはり体験しなければ分からない、に行き着く。

2年間で学んだことの1つにセッションとファシリテーターがある。セッションがうまくいくためにはファシリテーターの振る舞いが大切である事は言うまでもないが、メンバーに必要なことは何だろうと考えることも多かった。メンバーの中にセッションの趣旨を十分理解せず、つつい自分のことばかりを語ったり、持論を結論のように押し付けたり、持論を正解だと言うことをベースに話し続けたり、自分勝手な振る舞いをすればするほどセッションは盛り上がらない。言いたいことがリラックスして言える雰囲気が何より重要だと2年間のセッションで何度も実感した。

また、ファシリテーターが司会に終始し、セッションの雰囲気を考えない場合もセッションは盛り上がらない。教職大学院のカンファレンスでは滅多にそういうことが起こらなかった。ファシリテーターもメンバーもセッションの趣旨を踏まえた上で自分

がセッションを盛り上げるためにできることをやっているからだと思う。

こうして振り返るとセッションの成功の鍵は主体的で対話的に進める、ということに気づく。まず主体的になるために話しやすい雰囲気、結論を押し付けられない雰囲気、そこに安心と興奮があると自然と対話的となる。そういうセッションなら深い学び、深い話し合い聴き合いが成立するのではないかと考える。

研修会によってはグループの司会や記録、グループごとの発表者をグループ内で互選するように指示があることがあるが、これには少し無理があるように感じる。グルーピングで同じ学校が同じグループにならないというルールだけでは当日のセッションがファシリテーター頼みになってしまう。ラウンドテーブルや教職大学院のセッションではない時にファシリテーター頼みではお互いに主体的になるのはなかなか難しい。ましてや課題や解決策も自分たちで出す研修では、ファシリテーターやセッションそのものの研修でない限り、メンバーの負担が大きくなり、セッションがうまくいくためのエネルギーが減っていくように思える。

2年間教職大学院のセッションに参加し、グルーピングの秘密や前日までの準備など、表に現れない部分を詳しく知る事はできなかったが、ファシリテ

ーターで一緒になった先生によれば、グルーピングの（PCによる）プログラムはできるとおっしゃっていたので何かそのような規則や関数があるのかもしれない。そのプログラムも含めてセッションのねらいや準備の方法をこれからの教員生活の中でつかんでいきたいと思う。

学位記伝達式の後、再出発のカンファレンスを行った。セッションとしては1時間と短いものだったが、2年生から1年生へ伝える場面も、自分の2年間の振り返る場面もメンバーが主体的で対話的だった。2年間の締めくくりらしい時間だった。

「語り合う」～この2年間の思い～

学校改革マネジメントコース2年/福井市明新小学校 坪川 修一郎

今年の3月は今までにない、いくつかの別れがありました。23日の学位授与式では2年間、大学院で学び合った仲間たちとの別れ。そして、今回の異動により結果として学級担任として最後のクラスとなった子どもたちとの別れ。外を眺めると、すでに桜の花が開こうとしています。その風景が私の気持ちをなお切なくしています。

〔2年間の大学院を思う・・・〕

さあ、今日はカンファレンスだと大学へ向かう日々。2年前にスタートした時は、毎回同じようなことを話し続ける状況に、「これはいつまで続くのだろう？」「私は大学に何をしにきているのだろう？」と？マークたくさんの思いを抱いていました。しかし、いつの間にか、「語り合う」ことを楽しみにしている自分、「語り合う」ことを通して、自分自身の今、過去を振り返り思い返している自分がいることに気づいてきました。昨年10月には突然の大学からの依頼で話題提供を行うことになりました。「新しい世代と支え学び合うことの意味」というテーマ。「何、これ？私は何を話せばいいの・・・」という戸惑いばかりでした。わずか15分程度の話題提供でしたが、話をしながら自分の思いが整理されていく不思議な経験をしました。同じ感覚を2年目の4月のカンファレンスで1年目の学びを何回も語っている時に感じました。「これが学びなのかもしれない」遅ればせながら、またわずかながら気づいてきたようです。「語り合い」とは私の語りを聴き、返してくれる相手がいて初めて成立します。私の拙い語りを聴き、いろいろな思いを返してきてくれた

方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

〔学級担任として、2年間の思い・・・〕

市教委勤務から大学院入学と同時に現任校の特別支援学級担任として着任しました。この3月の異動で結果として私の担任する最後の学級となりました。「もう一度担任がしたい」という思いがかなえられ嬉しい気持ちでいた2年前の4月から2年間。しかし、実はここまで過程は決して順調な場面ばかりでなく紆余曲折したものでした。困難な状況の時に私を支えてくれたものは、苦楽を共にしてがんばっているもう一人の特別支援学級担任との「語り合い」でした。放課後になると、どちらからともなくその日にあった出来事や子どもたちの様子を話し出します。毎日のように自然に繰り返される「語り合い」。そして、いつの間にか変わっていった子どもたちの姿。「子どもたちが自分たちで自然と変わっていく」これも今までの私が感じたことのない不思議な経験です。「語り合う」ことから生まれてきた「気づき」「同僚との信頼関係」の大きさを今、なお感じています。支え合う同僚性とはこのようなことをいうのではないのでしょうか。

〔最後に〕

私がこの2年間の振り返り、思い浮かんだことを脈絡もなくつらつらと書いてしまいました。そして、今、思っていること。「語り合う」ことで得た自分の経験をもっといろいろな人に感じてほしい。そのために、学校の中に「語り合う」文化を作っていきたい。そのような決意を最後に述べて、筆をおきたいと思います。

長期実践研究報告会

2月4日（日）に長期実践報告会が行なわれました。今年度修了を迎える院生はこれまでの自身の歩みと学びをじっくりと語ることで改めて振り返り、また1年目の院生は修了生の語りに自身の姿を重ね合わせながら熱心に耳を傾けていました。

自分と向き合い続けること ～人と共に生きていく～

教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程 川崎 未央

2月4日、今年はM2として長期実践報告書を報告させていただいた。振り返ってみると、この報告会は、大学院での2年間の私の貴重な学びを、改めて価値づけ、総括する場になったように感じる。そう感じたことを2つあげる。

まず1つめは、「聞いてもらう」ことの意味である。今回報告をする中で、グループのメンバーの方が、気になることをいくつか質問してくださったり感想を言ってくださったりした。例えば、「Aちゃんは、まわりの変化とともにどう変化していったのか」とか、「川崎さんは、授業においても関わりにおいても、個を大事にしながらその子を集団の中でどう位置づけるのかを考えてたんやね」などである。このように他の人から質問や感想をもらうことで、私の省察はさらに加わり、深まった。また、他の人の実践についての省察を聞きながら、自分の実践を思い出し、そこで自分の実践を意味づける機会になることもあった。話を聞いてもらうことには、自分一人では気づけなかった視点を与えてもらい、もう一度自分の実践について振り返ることができるという意味がある。これは、この報告会だけで感じたことではない。この2年間での週間カンファレンスや月間カンファレンスで、ひしひしと感じるようになったことである。実践を振り返ることは、成長のために欠かせないことであるが、一人だけでは限界がある。他の人に聞いてもらうことで、新たに得られる視点や気づきがあることを今回もまた感じた。大学院は修了となるが、このような学び方をこれからも手放さず大事にしたいと思う。

2つめは、「書く」ことの意味である。正直、長期実践報告書を書き始めてからしばらくの間は、本当にしんどい時間が続いた。2年間の学びを書くことの意味が、いまいよくわからなかったのである。なぜ書くのか。2年振り返った先に何があるのか。大切そうだけれど、自分にとってどういう意味があるものなのか。インターンシップ先で書く日々の記録と

はどこか違うものがあるし…。長期実践報告書は、卒業論文とは異なり、自分の中のものと向き合い続けながら書いていくもので、それだけでも骨の折れる作業である。したがって、書く意義がまだよくわかっていなかった私にとっては、かなりつらい時間が続いていた。しかし、執筆終盤にさしかかると、やっとそのモヤモヤが少しだけ消え始めた。あれは何だったのだろう。この2年間、私が様々なことを感じ、悩み、考え、学んできたことは間違いない。けれども、簡単に言うと、執筆前は、一つ一つの経験や考えがまだ独立しており、つながっていないものが多かった。私の中に、「Aちゃんとのこと」「子どもを見とるってどういうことか」「Bくんとの関わり」などと一つ一つの考え学んだことはあるものの、全体として見てみると、なんだか漠然としていたのである。その一つ一つの私の経験や思い、考えが、執筆を続けるにあたり、ちゃんとつながっていたことに気づき、自分がどういうふうに進んできたのかが明らかになっていった。そして、その背景に流れているもの、つまり私がどういうものを大切にしようとしているのかがだんだん見えてきたのである。私が大事にしようとしているものは何なのか。

（理想）その上で、私はどんなことをして、どうなったのか。（現実）どういうものを大切にしたいのか、どういう自分でいたいのかという理想を明らかにしながら追い求め続け、かつ、その追い求め続けている理想と自分の現実との間で戦い、次への成長につなげていく。それが、書くことの意味だと感じた。他にもあるのかもしれないが、今の私はそう感じている。

また、執筆しながら、「あれ、こんな感じのこと前にも書いたな。（このときとあのときと同じようなこと考えてるな。私、成長してるんか。）」と思うことが何度かあった。以前気づいたはずのことだったのに、また同じことをやってしまったという意味である。「気づき始めたこと」と「元の自分」と

の間を行ったり来たりしていることを報告会で話すと、同じグループだった小杉先生はこうおっしゃった。長期実践報告書は、自分がぶれないようにするための「お守り」だと。すごく腑に落ちる言葉だった。一度「わかった」と思っても、それをいつでも実行できる自分では限らない。4月から、私の教師人生がスタートする。この報告書を私のお守りにして、前に進んでいきたいと思う。

この大学院で学ぶようになってから思ったことで

あるが、私が欲する答えというものは、そう簡単には手に入らないし、人からもらえるものでもない。地道に自分と向き合い続けていくしかない。それを身をもって感じた。そして、それは自分一人でするものではなく、話を聞いてもらったり、話を聞いたりする他者の力も必要であるということ。これからも、他者とともに考え生きていくことを大事にしながら、自分と向き合い続けていきたいと思う。

明救入りの事件

教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程 福岡 友輝

「100%大丈夫。」某芸人ではないが、私はあまり成果に関して100%という言葉を好んで使わない。使えるような自分であると思うことができない。「これだけやった。だから大丈夫。」というように自分を納得させるための自己暗示をかけるために言いたくなるが、やはり「100%」と言うことはできないし、そもそも100%やりきった境地など体験したことがないというのが私である。

2月に行われた長期実践報告会に持っていった報告書も当然100%の出来と言えるものではなかった。納得のいっていないもの、もやもやとしたものがある中での「とりあえず完成版」であった。もちろん私の報告から感じたことや意見をいただければ良いのはそうなのであるが、「そもそも自分で納得していないものが伝わるのか？」という不安しかなかった。不安の要因として、“自分の2年間の学び”という大きなものを誰かに報告するということが大きかった。週間カンファレンスでも自分の考えを伝える場はあるが、それは改めて省察したものというよりは、自分の中で“常にある芯”や“人生で培われた価値観”のようなものだったため、出すことに迷いはなかった。規模が大きいほど、中心として据えるべきところも定まっていなかった。とにかく、わからないままでの報告であったが、報告会の中で柳澤先生から「教科の楽しさと探究的な面白さとの違いは自分の中でどうなっているの?」「探究的な面白さって教科の専門性がないと伝えることができないのかな。」というご指摘をいただいた。その瞬間自分の中で、「ああ、自分は探究の楽しさが落ちていないんだ。」と何かが降りてきたような感覚になった。改めて考えると、確かに私の長期実践報告書での内容は「学びの楽しさ」を求めていく中で、探究していくことに楽しさを感じている子どもたち

の姿を書ききれていない部分があった。自分でも執筆を続けていく中で、「結局、言いたいことは書ききれているのだろうか?」「沼に突っ込んでしまった。」という感覚が片隅に住み続けていた。そういったものを内に持ち続けるのではなく、初めて外に出す、伝えることで改めて自分の中で整理されていた。

私は同じ経験を子どもたちからも学んだ。インターンシップ先の学校で4年生が行っていたラウンドテーブルでは、私たちが実際に福井大学で行っているようなラウンドと同じような設定で報告が行われていた。正直、私たちのような大人と同じようなラウンドができるとは思っていなかった。私自身もラウンドでは毎回直前になると、どうやって報告をしようか悩んでいる。しかし、子どもたちの姿は予想以上であった。子どもたちがしていたのは「発表」などではなく、もはや「対話」であり、双方向関係から学びを経ている。1年間の学習で学んだことのみならず、そこから自分が考えたこと、これからやっていきたいことを相手に伝える。そして聞き手はそれに対して質問や、報告者の疑問に答えてあげる。そういった私たちのラウンドをそのまま行っている子どもたちの姿があった。もちろん全てのグループでそういったことができていたわけではない。しかし、4年生という子どもたちにも自らの歩みを「語る」「聴く」力があり、それを活かす・育てる場を設けることの大切さを感じた。

私はこの2年間を振り返った際に、「話す、聴く、考える」をどのような比率で行っていたのかを考えた。おそらく「3、2、5」くらいではないかと思う。とにかくいろいろなことを考えてきた。しかし、考えてはいるのだが、それを上手く伝えることができない、誤解されてしまうことがあった。また、

他者の意見や考えに触れても、上手く自分の考えを照らし合わせて新たな考えを生み出すことができないこともあった。どちらも、「自分の考えと対話する」力が育っていなかったことが原因であったのだろう。なぜラウンドのような場で話すことに意味があるのだろうか。それは、「話す」「報告する」で終わらない、本当に大切なのは「聴く」そしてその

先の「自分や相手との対話である」ということを2年間の最後に感じた。柳澤先生からのアドバイス、そして子どもたちの姿は、これまでの自分の実践や考えを整理し、今後に向けさらに良いものにしていくための道を照らしてくれるまさに、私にとって救いの手が入った“明救入りの事件”であった。

長期実践報告会を終えて

学校改革マネジメントコース2年/あわら市伊井小学校 長谷川 有希

2月の長期実践報告会を控え、1月はその実践記録の完成に必死になっていた。毎日のようにPCとにらめっこ状態で、最低でも70ページは書かないと…そんな思いでこれまでのレポートや実践記録を見つめながら編集作業を行っていた。そんな中、過去の実践に対して、また新たな発見や省察が生まれ、気づいたら140ページを超えていた。これはちょっと内容が多すぎるような…そんな気がしてさらに整理を繰り返し、最終的には120ページに落ち着いた。

私の長期実践記録は、第Ⅰ章「どうやったら学力は伸びるのか」、Ⅱ章「教職大学院で学んだこと」、Ⅲ章「過去の自分をとらえ今後に生かす」の3つの章からなる。報告会のときは、Ⅰ章とⅢ章を中心に報告しようと考え、事前に重要な部分をマーカーで印をつけて臨んだが、発表会当日は気持ちが高まり、一人80分も時間を頂いたのにⅠ章の報告だけで時間いっぱいとなった。(苦笑)

私の学力向上に対する多くの実践について、グループ内の先生方は興味を持って聞いてくださった。その中で、特に関心を持っていただいた取組が、教職員のコミュニティづくりである。1年目は研究部会や低・中・高学年部会など、どの学校にもあるような研究組織で研究を進めていたが、夏の夏季集中で読んだ著書「コミュニティ・オブ・プラクティス」に心を奪われ、集団が、目的を持って何かを成し遂げようとする場合、最も大切なことは実践コミュニティであることを学んだ。研究会や部会は、その組織の形態や人数が重要ではなく、先生方が『集まって話がしたい、課題を共有したい、伊井っ子を伸ばしていきたい。』そんな思いで自発的に集まるような部会になることが理想であることに気づかされたのである。

まずは、先生方が、学力向上という共通の課題について、どう悩み、どう考えながら実践しているの

か知りたいと考えた。そこで、だれもが心を開いて何でも話せる空間作りが大切だと考え、次の5つを心掛けたコミュニティづくりを実践していった。①取り組む課題や目的が何かを理解して集まる。(自発的であればなお Good) ②温かい開放的な雰囲気をつくる。③親近感と刺激を組み合わせたリズムあるコミュニティ空間をつくる。④コーディネーターとして資料を厳選して提示する。⑤知恵や知識で批判したり、過剰管理したりしてはいけない、の5つである。この会の名称をいいコミュニティ(通称; いいコ)と名付け、だれもが本音で語れる会となって現在に至っている。

この会では、毎日の授業での悩みや家庭学習の与え方、学力テストの分析など多くの討論がなされ、ときには自発的に、新しく教科になる英語や道徳についての学習会を盛り込んだ形で行われるようになった。新採用の先生に大変好評だったのが、「いいコ」の中に、明日から使える知得情報の時間を設け、ベテランの先生と新採用の先生の情報交換の場として機能させた点である。例えば、漢字の効果的な練習方法や音読の教材やその仕方について、朝の会や帰りの会の効果的なスピーチ発表のやり方についてなど、明日から使える多くの情報交換会の場となった。

この2年間の多くの実践で、学力テストの正答率や授業及び学習に対する理解や意欲についての学校評価を数値化すると、確実に良い値となって表れた。これまでのカンファレンスやポスターセッションで、「何が一番大きな力となったのですか?」と参加者から質問されることがしばしばあったが、私は、一番大きな力は、先生方の「学力を向上させたい」という強い意識が芽生えたことと伝えた。本校の学力向上に対しての課題を共有し、授業改善の取組についての情報交換や悩みを共有する「いいコ」という実践コミュニティの存在が、学力向上の原動力にな

ったのではないだろうか。このように、長期実践報告会では、「いいコ」という実践コミュニティづくりについてグループ内から賞賛の声を頂き大変うれ

しく感じるとともに、今後もこのコミュニティの場を継続していきたいと強く感じている。

研究集会・公開研究会などの報告

伊那市立伊那小学校 平成29年度公開学習指導研究会

伊那小学校の総合学習の授業を見て

教職専門性開発コース 1年 吉田 和菜

初めて、伊那小の授業を見させていただき、クラス全体の対話で展開していく難しい授業を小学2年生で難くこなしている様子にびっくりした。この子どもたちがどのように自分の考えをこれほどまでに言葉にできるようになっていったのか、過程が大変気になった。研究会は一日かぎりで見えるものであり、とても素敵な姿を見せる子どもに戸惑いまで感じたほどだ。

私は、自由参観で2年春組の授業を見させていただいた。内容は、春組で飼っているヤギのゆうきくんの去勢をすべきかどうかというテーマでの話し合いだった。

近くの人と話をしたあと、またクラス全体での話し合いが始まり、「小屋を分けると、春組の方が長いから一緒に暮らした方がいい」「交尾したくてもできないことになる」「グリーンファームで好きになった子がいてもできない」という意見がでる。教師は「6匹の生活を大事にしたいという意見についてどう思う?」と聞くと、「でも」「楽しいけどさ」のつぶやきが出る。「6匹は楽しいけど、交尾したいと思っている。グリーンファームに行って交尾したら春組に戻ってこれば」という意見に「意味が分



かりません」という感想が出ると、教師は「先生は分かったよ」と言う。

上のように、去勢しないという意見の子たちの声が大きくなったが、去勢しない派の「6匹の生活を大事にしたいという意見についてどう思う?」という意見を出し、去勢する・しない、どちらの立場の意見も尊重されるように話し合いが展開されていった。まだ、人の意見によって自分の考えを再構成するという様子は見られなかったが、これからの話し合いがどのように進んでいくのかが大変気になる授業だった。

伊那小学校の実践を参観して

教職専門性開発コース 1年 山崎 洸亮

去る2月3日、長野県伊那市立伊那小学校の公開学習指導研究会に参加した。福井大学の学部生の時に伊那小学校の話や実践をいろんなところで聞いてきたものの、一度も研究会に参加したことはなかつ

た。福井大学に通うことになって5年目で初めて伊那小学校の生の空気を感じることができた。

研究会では、2つの授業を参観した。はじめは3年生の授業である。3年生は3匹のヤギを飼っており、

そのヤギたちが元気に過ごせるように手立てを考え、実行するという授業を行っていた。1匹が妊娠しており、お腹周りを測ったり、体重を計算したり、暖かい出産小屋を子どもたちが真剣に取り組んでいた。

次に2年生の授業を参観した。2年生では2匹の羊を飼っており、その羊たちが歩き回りやすい環境を作るという授業を行っていた。以前柵の外に合った排水路が、柵を広げた際に柵の中に入ってしまったため、その排水路の凸凹を埋めるのか埋めないのかの話し合いを行い、そこから凸凹をみんなで考えながら埋めていた。

私がこの2つの授業を参観して受けた印象は、（言葉は悪いかもしれないが）「やることがわからなくてサボっている子がいない」ということだ。子どもたちそれぞれが当事者意識を持って「自分に何ができるか」を常に考えているからこそ、一人ひとりが何かの作業に向かえるのだろうし、全員が話し合いを真剣に聞き合えるのだろうと思う。実際に教師はあまり具体的な指示はしていない。自分たちで必要だと思った環境整備を思い思いにやっていた。教職大学院では毎週木曜日に実践や教育について語

り合うカンファレンスが行われているが、そのカンファレンスでは語り合いを円滑に進めるファシリテート力・コーディネート力が求められることもある。子どもの学びに向かう意欲が主体である伊那小学校の実践では、教師の立ち位置はこのファシリテーターに似ていると感じた。

過去に何度か伊那小学校の実践を読んだことがあるが、一度実際に実践を見てみることは文字で実践を読むことに勝るのかもしれない。まさに「百聞は一見に如かず」である。しかし、この一見はあくまで日々の長い流れの中の一部を切り取ったものにすぎない。そのため、一見してみてもわからないことも増えたような感覚だ。伊那小学校を訪れるにあたって事前学習が足りなかったと思ったことは一つの反省点である。

私は現在、公立の小学校でインターンシップを行っている。「福井の公立の小学校と伊那小学校は違う」と言うことは簡単だが、公立小学校でも生かせるような点は際限なくあると思う。子どもの学びを保障するためには教師はどうあるべきかを、これからのインターンシップでも考え続けていきたい。

私からみた伊那小の実践

教職専門性開発コース 1年 松木 巧

学部時代からよく耳にしていた伊那小の実践。以前から記録を読んだり映像を観たりする機会はあった。しかし、そういった誰かの視点で切り取られたものから考えるうちに、自らの視点で伊那小の実践をみてみたいと考えるようになった。結果、参観させていただいた2つの授業から色んなことを考えることができた。

まず、2年生の学級で行われた、飼育しているヤギの去勢をするかどうかの話し合いを参観させていただいた。ここで私が注目したのは、教師による話し合いのまわし方である。授業を振り返ると、話し合いの中で去勢をしない派に意見が傾いているにもかかわらず、どちらの立場も同じくらい意見が出ていることに気づいた。これは、去勢をする派の意見をいくつか聞いたうえで、しない派の意見を聞くというように、それぞれの立場から話すターンをつくっていたことによると考えられる。このターンを切り替える際、教師は片方の立場からある程度の

意見が出たところで、子どもの言葉から考えることを焦点化して話し合いの中心にもってきていた。このようにして、自分の立場を押し付けるだけにならない話し合いを目指しているように考えられた。

次に、特別支援学級のA君を中心に4年生の調理実習を参観させていただいた。A君のグループの子どもたちはA君に調理を強制せず、A君の様子をみること適切な距離感を保つてともに活動していた。この関わり方ができるまで何度も関わりを重ねてきたのだろう。相手をここまで考えた関わりができる4年生の力に驚いた。

しかし、気になった点が1つある。それはA君を育てる教師の計画性である。分科会でA君の今後の方向性の中に『気持ちを自分の言葉で伝えられる』というものがあることを知った。振り返ると、A君は周りの子どもたちに関わってもらうことが多く、自ら同年代に言葉で発信することは少なく見えた。これより、どのようにして気持ちを伝えられるよう

にしていくのかを今回の調理場面を挙げて質問したが、教師による具体的な手立てはあまり返ってこなかった。私は、言葉での気持ちの発信が難しいなら、気持ちを推測してA君に聞くことで言葉にしてやるなどの教師の支援が必要なのではないかと考えた。指導の方向に盛り込まれているにもかかわらず、具体的な支援は考えられていないのではないかと不安になった。また、子どもたちの中でこの力が育まれるとして、その場合教師の役割は何になるの

だろうかと考えた。

伊那小の実践を参観させていただいたことで、いきいきした子どもたちの姿と、悩みながらも興味深い実践をされている教師の姿を肌で感じる事ができた。伊那小の実践に感心するだけではない感想を持てたことが、実際にみたことの大きな収穫だと思う。他の参観者の考えも聞くことで、もっと考えたいくなるような充実した1日だった。

待てども待てども

教職専門性開発コース 2年 福岡友輝

2月12日、雪に埋もれた福井の街並みを見ながら、このレポートを執筆している。先日の大雪で福井の地は一面が真っ白である。もはや、毎年感じている“寒い”どころの冬ではない。ここまでの冬を経験したのは初めてである。そして私はこの冬もう一つの初めての経験をした。

昨日2月3日、長野県伊那市立伊那小学校の公開研究会に参加させていただいた。伊那小学校については、夏季集中講座で「内から育つ子」「共に学び共に生きる」などの書籍を検討したこともあり、どんな学校であるのかは知っていた。しかし、その独自のカリキュラムについてあっさりとしたものしか知らず、実際に授業の子どもたちの様子を見て見たいと思い、初めて伊那の地を訪れた。「伊那小と言えば総合」とも言えるくらい、伝統的に総合学習に力を入れている学校なのだが、今回は珍しく伊那小が教科として国語の授業を公開するとのことで、私も総合と教科とのつながりについて考えていきたいと思い、国語を選択した。

研究主題が「内から育つ」となっているように、伊那小学校の先生方は、子どもたちから湧いてくる思いや意思を大切にしたい授業を行なっている。研究会でも子どもたちの姿が「伊那小らしい」という声が参観者から多く聞かれた。ここでの「伊那小らしい」という言葉は、伊那小学校で総合学習を通して子どもたちが自分の意思を表現することに長けている姿から発せられるものだと私は感じていた。前述

の書籍からも、伊那小学校の子どもたちは総合学習によって自分たちの思いを大切にしたい活動を繰り返しているため、思いを伝え合うということに慣れているのではないかという印象をもっていた。実際に参観した国語の授業でも、そのような姿を見ることができた。そして、授業者は子どもたちの意見を全て引き出しながら授業を流していた。この授業で私が考えたことは、授業者が子どもと、どのようなやり取りを行うのかということである。私自身、長期実践報告書で教師としての“授業中の姿”について考えを述べている。“待つこと”の大切さを自分の実践の省察から感じていたが、本当に待つことで子どもたちは考えることができるのだろうか、学びが深まるのだろうかと疑問に感じていた。今回の伊那小での授業を参観し、授業者の問いかけや、子どもたちとの対話の中で、ただ待つのではなく、そこには仕掛けがあってこそその姿なのだと感じた。

恥ずかしい話だが、私は高校生の頃まで、「果報は寝て待て」の意味を“幸せや良いことは追い求めるのではなく、やってくるのを待つのが良い”という意味だと勘違いしていた。本来の意味であるように、“やるべきことをやってあとは待つしかない”という姿、つまり子どもたちに対するしっかりとした発問や問い返しがあって子どもたちがそれに応えてくれるという“因果応報”が「待つ」であり、そのための意識をすることが授業者に欠かせないと考ええる。

子どもの気持ちを探る教師たちに出会う

教職専門性開発コース 1年 藤田彩恵

2月3日、伊那小学校において「お蚕様を飼ってみよう～お蚕様が作ってくれたまゆから初めての糸取りをしよう～」の授業を参観した。年間を通して蚕を育ててきた穀組が、繭から初めて糸を取り出すことを行った授業である。

煮た繭を透明のカップに入れ、糸口を探し当てた後、写真にあるような黒い紙が巻かれたペットボトルに糸を巻き続けていくという授業であった。この授業を受けていた子どもたちは、頑張って蚕が繭になった過程を知っているからこそ、その繭から取れる糸に対し関心が高い。冬休みには糸取りの方法を個人で調べ、クラス全体でどのように糸取りを行うか共有してからこの授業に臨んでいた。

クラス全体で統一した方法を使い、二人又は三人組で糸取りを行っていた。子どもたちは、自分たち

が作った糸を取ることに夢中になっていた。糸口を見つけ、その糸が切れないように巻き続けることは難しく、苦戦している班も見られた。手を動かしながら、子どもたちはたくさんのことを呟っていた。

授業後の検討会では、「子どもの気持ちが活動にどう重なっているのか」といった視点から、糸口が見つからず困っていた班の子どもの発言や穀組に入り一緒に活動していた特別支援学級の子の様子について具体的に話が交わされた。検討会に参加させて頂き、先生方が子どもの気持ちを探りながら発言しているのを聴いて、「子どもの気持ちが活動に重なっていなければ、今回の授業のような集中した子どもたちの姿はなかっただろう」などと考えた。必然性のある活動の設定が大切であると改めて考える機会となった参観であった。

平成 29 年度 宇都宮大学教育実践フォーラム

「当たり前」からの脱却を目指す

教職専門性開発コース 3年／福井市中藤小学校 山田 芳裕

近年稀に見る豪雪に見舞われた 2018 年 2 月。福井の大動脈である国道 8 号線が大渋滞し、連日降り続く雪は、私たちの生活を大きく狂わせた。全国ニュースで毎日のように福井が取り上げられる中、新幹線の運行状況を気にしつつ、福井から逃げるように宇都宮大学教育実践フォーラム（以下、宇大ラウンドテーブル）に参加した。院生として最後の、県外ラウンドテーブルの参加。先月末に書き終えた、長期実践研究報告書を携え、宇都宮の地に降り立った。そこで感じた衝撃や葛藤を赤裸々に振り返り、これからの展望を述べたいと思うのだが、以下に記載する内容は、宇大ラウンドテーブル終了時の私の率直な思いである。当時の思いを忘れないようにするため、多少辛辣な表現が多くなっていること、御了承いただきたいと思う。

宇都宮大学に到着するや否や「教育実践プロジェクト発表会」に参加した。これは宇都宮大学に在籍

する院生が、二年ないし一年間の実践を、全参加者の前で発表する場であった。宇都宮大学の院生は、ストレートマスター・現職関係なく、大学で講義を受ける。そして、三か月程度、学校現場に身を置き、実践を行うといったカリキュラムであることを知った。驚いたのは、現職の院生も一年間は大学院の連携校に配属され、ストレートマスターと同様に、実践を重ねるといった点であった。福井大学教職大学院のように、学校拠点方式を採用している訳ではないため、現職院生は一度休職し、大学院に入学することを発表の中で知った。栃木県教委の方曰く、現職院生は県教委から推薦を受け、派遣期間中は県が給与を支払うらしい。昨年度の長崎ラウンドテーブル同様、福井と宇都宮の違いを改めて感じた。発表内容としては、実習校での授業内容の取り組みや、一年間研究してきた成果等が多く発表されていたのだが、そこで私は、物足りない思いでいっぱいになってしまった。確かに素晴らしい実践をされている

ことは、発表の中で感じる事ができた。しかし、何故かしっくり来ていない自分がいた。

院生の発表を聴きつつ考察を続けると、その原因に気付いた。各院生の発表が、ものすごく綺麗にまとまりすぎているように受け取った。簡単に言えば、失敗した経験や葛藤のような、どろどろした部分が欠けているように感じた。

私たちは毎日、試行錯誤しながら様々な実践を積んでいる。日々のインターンシップや、週間カンファレンス等が、それに当たると思う。日々の実践を振り返ると、子どもたちとの関わりが上手く行ったり、カンファレンスで実りある話し合いになったりする場面は、全体を通して見ても、極わずかである。大半の場合、次の課題が見え、自分の言動を振り返り、次に生かそうとする。決して平たんではない試行錯誤のプロセスが大切なのだと、この3年間を通して、実感の中で学んだ。自分の実践を振り返り、次の展望を見据え考察し、再び実践する。先月、締め切りに追われながら執筆した、長期実践研究報告書が、それに当たるだろう。良くも悪くも、福井と宇都宮のギャップを覚えた発表会であった。

二日目のラウンドテーブルでは、私以外のメンバー全員が栃木県内の指導主事や教員、宇都宮大学の院生という構成であった。完全なるアウェーの中で発表を行うことになったのだが、何故か不安はなかった。これまで県内外のラウンドテーブルに10回近く参加し、初めて会う方に向かって、報告することに慣れていたのである。また、どのラウンドにおいても、私に共感してくださる方がおり、ほとんどが有意義な時間であったことも理由と言える。

しかし今回の発表は、これまで築いてきた経験や自信が、音を立てて崩れたように思えた。正直、全くと言って良いほど、楽しくなかった。私にも原因があったのだろうが、テーブルを囲むメンバーは、報告書の端々ばかりに目を向け、発表原稿の粗探しや、内容の批判等があまりにも多かった。互いの考えを聴き合う雰囲気が、そこにはなく、不完全燃焼

のまま、宇都宮大学を後にしたのであった。

帰りの道中、感じた思いを同行していた池田院生・谷口院生に伝えた。話し合いの中で出た結論は「福井の当たり前は、世間の当たり前ではない」ということだった。私たちは、日々のカンファレンスを通して、共に聴き合い学び合うことを、いとも簡単に行っている。大学院の先生方や現職の先生方、ストレートマスターの院生は、非常に聴き上手で、語り上手だということを再確認した。同時に、これまで狭い範囲で実践を重ねていたと痛感した。福井で当たり前に行われていることは、一步外に出れば当たり前でなくなる。それを肌で感じ「楽しくない」と思い込んでいた自分を恥じた。私が単純に外の世界を知らなかっただけということに、ようやく気付いたのだ。これまでの経験則を振りかざし、おごっていた自分や、3年間やってきたという自負に天狗になっていた自分が見え、恐怖さえ覚えた。今となってしまうと、その時気付いて良かったと、心から思う。

今年度末、私はこの教職大学院を修了する。院生としてNewsletterを執筆するのも、今回が最後である。修了してからも、自分の実践を外部に発信し続けたい。また、ラウンドテーブル等を通じて、様々な人たちと出会いたいと強く思う。

Newsletter最後の執筆ということに便乗させていただき、現ストレートマスターの院生に向けて、私が3年間、県外ラウンドテーブルに参加し続けて感じた思いを綴り、結びとしたい。

福井という範囲を超え、積極的に県内外に出て、自分の実践を広めてください。初めて出会う方々に、自分をさらけ出し、多様な意見をもらってください。固まりがちな考え方が破壊され、視野がどんどん広がります。そして、多様な「人」とのつながりを作ってください。そのつながりが、自分自身の成長に大きく関与すると思います。教師という職業は、一人ではできないと思っています。互いに認め、つながり合う中で、最も自分が輝けるスタンスを築いてください。3年間、ありがとうございました。

モヤモヤと充実感

教職専門性開発コース3年／福井市明新小学校 池田 丈明

長期実践報告書の初稿を書き終え、福井 RT を来週に控えた 2018 年 2 月 10 日（土）、私と山田院生と谷口院生は宇都宮で耳を傾けていた。講堂前方に 1 人ずつ宇都宮の院生が立ち、パワーポイント（以下、PPT）で研究発表を行っていた。

彼らの持ち時間は 1 人 20 分。発表が 15 分であれば、残り 5 分は質疑応答。もし発表が長引くと、1 セクション 3 人の発表後にまとめて質問タイムが設けられる。発表では、PPT のスライドに合わせて原稿が読み上げられる。彼らは、修士論文や長期実践報告を書く必要がないので、この発表が院生生活の集大成になる。内容は、入学時に決めた研究テーマを現場でどのように実践し研究し成果を出したかが主である。院生は「長期インターンシップ」（1 年目は全員附属に行き、2 年目は研究テーマを受け入れてくれる学校に赴く）をベースに、毎週金曜リフレクションに参加し、福井大学と似て非なるカリキュラムの中で学んでいる。

研究発表会は、非常に興味深く、飽きずに聞くことができた。しかし、何かモヤモヤしたものが残った。このモヤモヤは一体…。その謎は後ほど記す。

明けて 2 月 11 日（日）、少人数テーブルに座った私は、額に変な汗を浮かべていた。生誕間もないホカホカの長期実践報告書『組織と格律』が私の発表資料であることに不安を抱えていたからだ。私は自分自身を研究したが、教育研究（授業デザイン、教授法、ICT 活用、協同学習など）を主に行っているこのような場所において、批判の対象になりかねないと案じていたのだ。発表の時間がきた。初出しということもあり、少し長い時間喋ってしまった。喋り終わり、質疑応答になった。険しい顔の男性の先生がゆっくり喋り始めた。あーもう終わりたい、帰りたいと本気で思った。そんな私の気も知らずにその先生は言い放った——「素晴らしい。」私は耳を疑った。さらに、他の先生も口々に賞賛してくれた。

「私は出版社に 3 年勤めた後、教員の道に来了。第 3 章で感じた教育界と一般の間のショックはまさにその通りだと思う。」「保護者に上から行きがちな人多いから、若手の先生にこの経験を話してほしい。」

「子供にこの経験を小出しにしながら話して欲しい。」「社会ってよかれと思ってしたことが仇になることが多いから、それを子供に訊ねてほしい。」と言ってくれた。発表の最後に「授業を是非見てみたいから、福岡県で赴任先の学校分かったら教えて

ほしい。」と言われ、名刺をくれた先生もいた。まさかの絶賛に涙がでそうになった。豪雪の影響がまだ色濃く残る福井から、はるばる宇都宮に来てくれたという優しさもあったかもしれない。しかし、賞賛の言葉と自分の知らない自分の活かし方などの助言は、率直に嬉しかった。会場を出ると、充実感が心を満たした。

帰りの新幹線に乗り込み、駅弁を食べつつ、充実感の源泉、つまりテーブルのメンバーから賞賛の言葉をもらえた要因を探った。すると 3 点思い至った。1 点目は、自分の弱さを赤裸々に記し、それを省察していたから。2 点目は、万人が悩んだ経験を持つトピック（おそらく「組織」）にスポットを当てたことで、聞く人が追体験し易かったから。3 点目は、語る際、原稿や文をそのまま読まず、自分の言葉で相手の目を見ながら喋ったから。だが、何か足りない気がした。そして昨日のモヤモヤを思い出した。新幹線が「ゴッ」といってトンネルに入った。院生として、宇都宮大学と福井大学は、違うテーマだが等しく「発表」を行った。しかし、昨日の懇親会で宇都宮の人がぼそっと呟いた「PPT での発表ってあんまり面白くないですね。さらし者って感じがして…」という言葉は、充実感を得た人からはきっと出てこない。一方で私は充実感を感じた。ならば、何が違うのだろうか。トンネルを抜け、夕焼けに染まる銀世界が目に見え込んだ時、ある思いが言葉になり、口からこぼれた。「発表者が聞き手の感想を聞く機会があったらどうか。」思い返すと、昨日のような大人数の前で喋る際、発表者の「伝えたい」という労力に対し、聞き手の「聞き取ろう」という意欲が比例していたかと問われると、私は答えに窮してしまう。また、聞き手が発表者に気持ちを伝える時間が少ないもしくは皆無ということでは、聞き手も思いを伝えられず消化不良のモヤモヤを抱く。発表者も伝えたいことが伝わったかどうか不安のままに、モヤモヤしながら時間を終える。これは、まさに昔のような教え込みの授業そのものではないだろうか。ふと「研究の発表会は一斉授業？」と疑問をもったところで、福井駅に到着した。

私の教師生活が間もなく始まる。喋りすぎず、子供の意見をたくさん聞きながら、授業を進めたい。教室を温かい雰囲気で包み込み、子供全員が安心して勉強できる学級を作りたい。ふと気がつくと、汗

ばんだ手のひらの中で切符が餃子の具のように丸く なっていた。

カリタス女子中学高校授業研究会

カリタス女子中学高校の授業参観と研究会に参加して

福井大学教職大学院客員教授／福井医療大学 森 透

2月23日（金）に川崎市にある拠点校のカリタス女子中学高校の授業参観と研究会に、カリタス担当の松木先生と花井先生と私の3人で参加してきました。授業は「保健体育科」で、単元は4年生（高校1年生）の「器械運動（マット運動）」でした。マットで自由な表現をする身体表現の授業で、1グループ、7—8名の女子生徒が自分たちのマット表現を1—2分の持ち時間で音楽に合わせて創造し表現するものです。参観者の前での身体表現は気恥ずかしい年齢であるにも関わらず、もう16時間目という長い単元ゆえの生徒たちの慣れと探究の様子がみてとれました。最終的に、3月9日（金）の創作マット運度発表会にむけて練習を積み重ねているという状況でした。

担当の北原先生にお聞きすると、マット運動は嫌いな生徒が多く難しい単元であるけれども、Iパットで撮影し、すぐに自分たちの身体表現を見ることができ、よりよくできる面白さがあると言われていま

した。生徒たちもIパットを非常に興味を持ってみて、いろいろお互いに指摘しあっていました。

体育という教科は、得意・不得意が明確になる教科ですが、グループで取組むことで、得意な生徒は不得意な生徒をサポートする側にまわり、グループでのコミュニケーションが深くなり、お互いのよさを認め合うという特徴も授業の中でみられるようでした。私は今まで福井大学附属の体育を見る機会がありましたので、そこでの印象を踏まえて授業を参観することができました。最後の研究会でも、これからの体育は生涯スポーツとして意義を持ち、学校での体育の経験を生涯にわたってスポーツに親しむことにつなげることが大事であることが全体で確認されたように思いました。カリタスで体育科の授業参観をする機会がなかなかなかったのも、今回は新鮮な授業参観となりました。北原先生をはじめ、カリタスの先生方には大変お世話になりました。

学位記伝達式

去る2018年3月23日（金）、コラボレーションホールにて平成29年度の学位記伝達式が執り行われました。平成29年度は、教職専門性開発コース13名、ミドルリーダー養成コース9名、学校改革マネジメントコース13名の合計35名の院生が教職大学院を修了しました。学校改革マネジメントコースは第一期生となります。式では、在校生やスタッフらが見守る中、石井パークマン麻子研究科長から祝辞と各コースの代表者に学位記が授与されました。その後、笑顔が見られる和やかさの中で柳澤研究科長からお一人おひとりに、学位記が授与されました。

学位記伝達式の後に、再出発のカンファレンスが行われました。社会に向けて第一歩を踏み出す方、職場での実践をさらに積み上げていく方、新たな職場やポジションに付く方、2年目の院生活に向かって決意を新たにしている方など、学校種や立場が様々な仲間たちが語りと傾聴の時間を過ごしました。学んだことは何か、変化したことは何か、何が大切なことなのか、何を大切にしていきたいのか、これから何をしていきたいのか、これまでとこれからを繋ぐ、熱い時間がどのテーブルでも繰り広げられました。さらに修了された院生のみなさんからはこ

れからもっと大学院がよい学びの場所になるようにと、要望も出していただきました。

教職大学院を修了された方にとっても、1年目が修了された方にとっても、一つの区切りは次の始まりであり、それを確かめ合った再出発カンファレンスとなりました。

最後に、この春、教職大学院を退任される倉見先生、綾城先生、ハートマン先生の3名の先生よりご挨拶がありました。新たな職場はそれぞれです。倉見先生は文部科学省初等中等局教育課程課の主任学校教育官としてのお仕事を、綾城先生は駒沢女子大学心理学類で臨床心理学・教育心理学を担当され、ハートマン先生はワシントン大学で非常勤講師として数学と理科教育を教えられるとのこと。今後の、ますますのご活躍が期待されます。そして、わたしたちにとっては文部科学省に、東京の大学に、シアトルの大学に、この教職大学院の強力な支え手が増えました。倉見先生、綾城先生、ハートマン先生に感謝の言葉を、終了された院生のみなさんにはお祝いの言葉を申し上げるとともに、今後もこのご縁を大切につなぎ合っていきたいと願っております。

（荒木・高阪）



* JICA Group and Regional-Focused Training: Improvement of Quality of Education through "Lesson Study" in Asia

庫入試關係は予定

福井大学教職大学院「学校改革実践研究報告」目録(平成29年度分)		
No.	名 前	論文名(主タイトルのみ)
295	池田 文明	組織と格律
296	長谷川 久里子	自然体の人間関係を求めて
297	山田 芳裕	互いに認め合い、人と人との「結ぶ」教師になるために
298	川崎 未央	教師とは何か
299	小形 光輝	変わりゆく文化、変わらない感動
300	山内 愛音	「してあげる」意識から「子どもに応える」意識への変化
301	廣田 久奈	子供同士の思いを意識したかわり
302	竹内 瑞貴	内なる理論の形成
303	北本 瑞穂	教師の役割を探す
304	中山 詩菜	思考と行為を結ぶ
305	田中 亮	「意志」を持つ
306	福岡 友輝	“学びの楽しさ”を哲学する
307	山上 晃平	見捨てたらアカン
308	森 裕美子	教員の「つながり」を考える
309	藤田 未来	学びを見取り、授業をつくる
310	志村 智恵美	自分の進むべき道を探す2年間
311	永曾 義子	教師は授業で勝負する
312	森 匡史	「自ら学び、探究する人間」を育てる
313	前田 栞里	学び続ける保育者となるために
314	横澤 朋	子どもたちとつくる保育
315	八木 康文	個人の学びを学校に生かす
316	長谷川 有希	学力向上をめざして
317	一瀬 泰史	つながりあう元気な教師集団づくりを目指して
318	加福 秀樹	組織を動かす力
319	松下 雄平	中台中型教科センター方式の発展に向けて
320	斎藤 治	教頭としての小規模校における学校改革の取り組み
321	加畑 重樹	多文化共生社会の実現に向けた基盤の構築
322	岩崎 俊文	一人一人が生かされる学校をつくる
323	虎尾 茂樹	SCHOOL REFORM
324	斎藤 実紀夫	児童・保護者・地域との協働でつくる学校
325	林 小百合	つむぐ
326	片山 浩	小グループによる話し合いを軸とした多忙化解消に向けて
327	坪川 修一郎	「語り合い」から始まる学校改革
328	松田 ひとみ	教師の協働を支えるコミュニティ
329	常廣 和美	教師間の協働を考える

返還義務なしの
3年間で小学校教員免許取得プログラムもある
福井大学教職大学院に

いこつさ！

カリキュラム説明会 6月16日(土)

13:00~14:00

説明会等の当面の予定

8月4日 夏期大学院進学説明会

10月20日 秋期大学院進学説明会

1月12日 冬期大学院進学説明会

Schedule

4/21 Sat -22 Sun 4月合同カンファレンス A 日程 **4/28 Sat -29 Sun** 4月合同カンファレンス B 日程

5/19 Sat 5月合同カンファレンス A 日程

5/26 Sat 5月合同カンファレンス B 日程

6/16 Sat 教職大学院カリキュラム説明会

6/22 Fri-6/24 Sun 実践研究福井ラウンドテーブル Summer Sessions 2018

【編集後記】

個人のお宅ですが見事な桜の木があります。花の付き方や開花の時期からソメイヨシノではないことはわかりましたが、名前がわかりません。図鑑で調べてエドヒガンという名前がわかりました。名前がわかるとあちこちのエドヒガンが目に入るようになりました。わかると見えてくる、そういうことはよくあるなと思いました。本年も宜しく願いいたします（Y）

教職大学院 Newsletter **No.109**

2018.4.7 内報版発行

2018.5.7 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdofukui@yahoo.co.jp